厚生労働科学研究費補助金【エイズ対策政策研究事業】
エイズ動向解析に関する研究（分担）研究報告書

HIV 感染者/エイズ患者の予後解析及び可視化動向情報が自治体や報道機関等の普及啓発に与える影響の解析
- 名古屋市無料検査会における検査結果と受検者による性感染症既往歴認識の乖離に関する研究-

研究分担者　今橋真弓　名古屋医療センター　臨床研究センターDSSSSS

研究要旨

本研究では、性的にアクティブな受検者層における B 型肝炎および梅毒抗体陽性率および既往認識を明らかにすることで、それらに対する有効な普及啓発を検討した。
2018 年 5 月に行った名古屋市無料匿名 HIV 検査会に来場した受検者 664 人を対象に行った性感染症（HIV・B 型肝炎・C 型肝炎・梅毒）検査結果および質問紙法で行ったアンケート結果を検査番号にて紐づけを行い、各検査項目陽性率と性感染症の既往認識について調査した。
96.4%の受検者が男性で、83.8%の受検者の性指向がゲイ、80.7%が過去に HIV 検査歴があった。梅毒・B 型肝炎抗体陽性率は 16.8%、16.5%で、34.6%、59%が梅毒・B 型肝炎が検査結果としては既感染を示すものの、既往歴としては認識されていないことが明らかとなった。
今後は検査の際に、疾患に対する情報提供も行っていく必要があることが示唆された。

A. 研究目的

2016 年に B 型肝炎ワクチンが定期接種化されたものの、その対象者は 1 歳にいたるまでの小児であり、性的にアクティブな若年者は対象となっていない。本研究の目的は性的にアクティブな受検者層における B 型肝炎および梅毒抗体陽性率および既往認識を明らかにすることで、それらに対する有効な普及啓発を検討することである。

B. 研究方法

2018 年 5 月に行った名古屋市無料匿名 HIV 検査会に来場した受検者を対象とした。検査項目は HIV-1/2 抗原・抗体、HBs 抗原、HBc 抗体、HCV 抗体、RPR、TP 抗体を受検者全員に行った。既往歴のアンケートは基礎属性、検査受検歴、性行動も含めて質問紙法で行い、検査採血施行後検査会場にて回収した。検査結果とアンケート回答は受検番号で紐づけを行った。

統計ソフトは STATA ver 15.0 を使用した。

C. 研究結果

総受検来場者数は 664 人、そのうち、検査を受検しなかった 1 人、アンケートの回答をしなかった 16 人、HIV 陽性者 10 人を除外し、637 人を解析対象者とした。

受検者背景は表 1 の通りで、96.4%の受検者が男性で、83.8%の受検者の性指向がゲイだった。年齢の中央値は 32 歳であった。

表 1：受検者背景

	n=637
年齢（歳）:中央値[range]	32 歳[17-70]
性別（n,[%]）	
男性	614[96.4]
女性	12[1.9]
その他・無回答	11[1.7]
性指向（n,[%]）	
ゲイ	534[83.8]
バイ	63[9.9]
ヘテロ	9[1.4]
その他	31[12.6]
HIV 検査歴（n,[%]）	
あり	514[80.7]

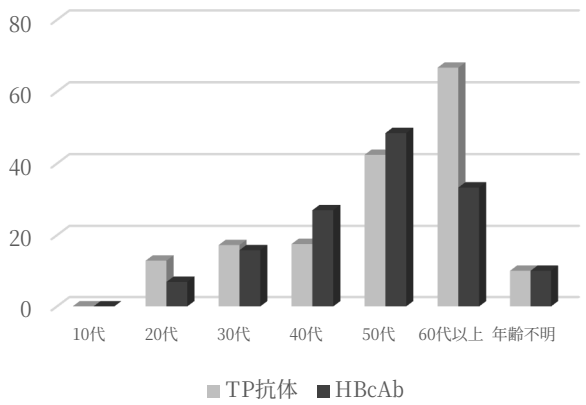
各検査項目の陽性率は下記表 2 の通りであった。梅毒の既感染を表す TP 抗体の陽性者は 107 人（16.8%）で B 型肝炎の既感染を表す HBc 抗体の陽性者は 105 人（16.5%）であった。

表 2 .各検査項目陽性率

	陽性者(n [%])	
RPR	25	(3.9)
TP 抗体	107	(16.8)
HBs 抗原	2	(0.3)
HBc 抗体	105	(16.5)
HCV 抗体	0	(0)

年代別に TP 抗体および HBc 抗体の陽性率を表したものが図 1 である。どちらも 20 代から 50 代にかけて陽性率が上昇していた。

図 1：受検者年代別抗体陽性率



次に受検者が自己申告した病歴と検査項目の結果における乖離があるかどうかを検討した（表 3)。割合は各検査項目陽性者を分母として算出した。TP 抗体陽性者 107 人のうち 37 人（34.6%）が梅毒を既往歴として回答せず、20 人(18.7%)が性感染症の既往なしと回答した。HBc 抗体については 105 人の陽性者のうち 62 人（59%）が B 型肝炎を既往歴として回答せず、23 人（21.9%）が性感染症の既往なしと回答していた。

表 3：抗体陽性と既往歴の自己申告の不一致割合

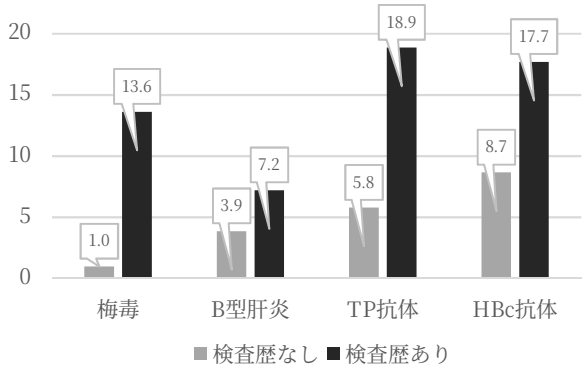
既往(-)/検査(+) (n, %)		
梅毒(-)/TPAb(+)	37	(34.6)
B 型肝炎(-)/HBcAb(+)	62	(59.0)
既往いずれもなし/検査(+)(n, %)		
/TPAb(+)	20	(18.7)
/HBcAb(+)	23	(21.9)

最後に検査歴別に梅毒・B 型肝炎の既往割合および TP 抗体・HBc 抗体陽性割合を示したのが図 2 である。検査歴があっても梅毒・B 型肝炎共に実際の抗体陽性率より低かった（梅毒　13.6% vs. 18.9%, B 型肝炎　7.2% vs.17.7%: それぞれ自己申告率 vs.　抗体陽性率)。

D．考察

本研究では名古屋市無料性感染症検査会で行われたアンケート結果および検査結果をもとに自己申告の既往歴と既感染を示す抗体陽性率に乖離があり、必ずしも検査歴があるからといって正しく既往歴が認識されているとは限らないことが示唆された。

図 2：検査歴別既往自己申告率と抗体陽性率



ワクチンのない梅毒については今後も年代が上がるにつれて、TP 抗体陽性率が増加していくことが予想される。

特に B 型肝炎の既往認識が低かった理由としては、梅毒は発疹や陰部潰瘍といった目視で確認できる症状が出現することがあるが、B 型肝炎の場合、無症候のうちに急性期がすぎてキャリア化していることが考えられる。

B 型肝炎ワクチンは日本では 2016 年 10 月から 0 歳児を対象とした定期接種ワクチンとなった。それゆえ若年者の HBc 抗体陽性率は今後は減っていくことが予想される。しかし、B 型肝炎は性感染症という側面があることから、現在性的にアクティブな若年層も含めてワクチン接種対象として拡大していくことが真の B 型肝炎予防という点では必要となる。その際に、今回の検査会に参加した受検者層（性的マイノリティの特にゲイ・バイ男性）をハイリスク層として最初にワクチン接種を積極的に進めていくべきかどうかは、B 型肝炎発症者の患者背景データおよびワクチン費用対効果を含めた検証が必要である。

HIV 検査歴がある人の TP および HBc 抗体陽性率は高いことから、本検査会の受検者は性的にアクティブな集団であることが示唆された。

E．結論

梅毒と B 型肝炎については検査歴があっても十分に既往歴として認識されていないことが示唆された。今後は検査時に疾患についての情報提供も行っていく必要がある。

F．研究発表

１．雑誌

２．学会発表

今橋真弓、椎野禎一郎、金子典代、石田敏彦、蜂谷敦子、岩谷靖雅、横幕能行　HIV 感染症／エイズの公衆衛生学対策に対する梅毒と B 型可燃を代替疾病とした GIS 解析の有用性の検討．地理情報シ

ステム学会総会．2018 年 10 月．東京

椎野禎一郎 、蜂谷敦子 、今橋真弓 、 松田昌和、岩谷靖雅、横幕能行、 金子典代、羽柴知恵子、吉村和久 国内伝播クラスタの検索プログラムの開発２：東海地方で若年層に急速に伝播を 広げるクラスタの検出. 第 32 回日本エイズ学会学術集会総会．2018 年 12 月．大阪

松田昌和、今橋真弓、蜂谷敦子、重見　麗、 岡崎玲子、矢野邦夫、鶴見　寿、奥村暢将、谷口晴記、椎野禎一郎、羽柴知恵子、今村淳治、横幕能行、岩谷靖雅　東海ブロックにおける分子疫学的 HIV-1 感染網の特徴. 第 32 回日本エイズ学会学術集会総会．2018 年 12 月．大阪

今橋真弓、金子典代、椎野禎一郎、松田昌和、蜂谷敦子、岩谷靖雅、横幕能行、羽柴知恵子　名古屋医療センターにおける 2009 年～2016 年未治療初診患者の広報誌的生存率検討. 第 32 回日本エイズ学会学術集会総会．2018 年 12 月．大阪